ひかりのこ

光の子

No.213　2024.3.25

●**年間聖句**　何事も愛をもって行いなさい。（コリント信徒への手紙16章14節より）

「通学路という名の冒険道」　表紙絵・中島 由起子

卒業子

黛　まどか

梅林の外れの野梅香りけり

卒業子連絡船にまぎれけり

ふらここの母に島々晴れわたる

シーサーの春立つ海を見つめゐる

雨だれに囲まれてゐる涅槃絵図

ブランコの夕日をのせて揺れてをり

殉教の島をめぐりて暮れなづむ

退任のご挨拶

光の子どもの家施設長　竹花　信恵

やわらかな春の日差しが感じられる今日この頃、新たな年度が始まろうとしています。光の子どもの家も出会いと別れの季節を迎えました。私自身もこの春をもちまして定年退職を迎えることとなり、光の子どもの家の施設長は交代致します。長い間お世話になりました。あっという間だった月日の流れを感じるばかりですが、与えられた日々と出会いに心より感謝申しあげます。

創立時からずっと関わらせていただきました。ここでの暮らしは40年になります。出会った「子ども」がいつの間にか「大人」となっていきました。卒園生も3桁となっています。そんなたくさんの、ひとりひとりの人生の土台にこの家はありました。その間、自分に何ができたか、ただ居続けることでした。子どもたちの表情が輝いていく、自己表現できるようになっていく、その変化がこの家の日常にはありました。

施設長としては10年でしたが、当初子どもを直接担当する保育士として、寝食を共にしてきた日々のエピソードは宝物です。自分自身未熟すぎて何もできず、わからないことだらけでした。立ち上がれない、笑えない時も、つい昨日のことに思われます。それでもつながっていられたのは、皆さんに助けていただいたことはもちろん、日々の暮らしの中で「どうしてこんなにかわいい素直な子どもたちだろう、私だったら、こんなにまっすぐ生きられない」という驚きがあり一生懸命生きている子どもたちへの尊敬と、こんな私でも少しでも役にたちたいという思いが自分の原点となっていったからだと思います。

創立以来たくさんの皆さんが応援してくださった姿がこころに焼き付いています。木を植え、種を蒔き、草取り、修繕などの環境整備、孤立無援状態の時でも応援にかけつけてくださった方々、準備が追いつかないこの家の行事の実施など何か当たり前に思ってしまうくらいに皆さんのちからが集まりました。今思えば、どんなにすごいことだったか、決して当たり前ではなかったことを思います。今ももちろんどれほどたくさんの皆さまの応援をいただいているでしょう。ボランティアの皆さま、地元後援会の働き、そして東大宮教会をはじめ、祈っていただいている全国の皆さまのあたたかなご支援にあらためましてこころより感謝申しあげます。

これからも光の子どもの家を必要とする、ここにたどりつくしかなかった子どもたちがやってきます。子ども家庭庁ができたりクローズアップされることはありましたが、相変わらず入所の依頼だけは続き、増え続け、反面このような施設での働き手は少ないということは何も変わっていないのが実情です。「家族にかわる」という表現も、ある意味、覚悟なしには使えなくなりました。関係が近いほど難しくなることが多すぎるからです。何があっても受け止めていく覚悟、決意が試される場面があります。抱えている問題は重く、個人ではなくチームとしてかかわること、様々な事に巻き込まれ疲弊する対応策も必要になります。それでもどんなことがあろうと、この家の主人公は子どもたちです。彼らは、どこまでもまっすぐに受け止めてくれるか、その本気度を試し続けます。誰かにしがみつくこと、それがしたかったと大きくなった子どもからの一言に、ハッとされられました。

「子どもの最善の利益」という言葉も懐かしさを感じるほど時がたってしまいました。光の子どもの家の働きはなかなか子どもたちの必要に追いつきませんが職員一同ちからを合わせて参ります。これからも社会の中で一番弱いところにしわ寄せがいくことは変わらないでしょう。弱く、小さなものへのまなざしがあること、最も守られなければならない存在を大切にで

きることがこの家らしさだと心から思います。光の子どもの家の働きは続きます。これからも光の子どもの家らしく歩めるようにお祈りください。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

【お知らせ】
２０２４年度より、穴水祐介副施設長が、施設長に就任します。変わらぬご支援をよろしくお願いいたします。

結構辛い85歳

老健施設紅寿の里　施設長　仙道　富士郎

命を助けてもらったかもしれないのに、しばしば悪口を言うのは人でなしなのだが、がん摘出術の術後化学療法は色々なことを仕出かしてくれるようだ。

話せば長い事情により、上前４歯が義歯なのだが、昨年、それが次々に脱落した。補充すべく、歯科で部分入れ歯を作ってもらった。ところが、その入れ歯を使ったところ、関係なさそうな歯が６個も次々に落ちてきた。食べ物に混じて脱落するので、飲み込んでしまいそうで、すこぶる危険である。「歯を飲み込んでしまいました」、いくら85歳とはいえ、いかにも格好が悪い。脱落した歯はすべて義歯なのだが、何十年も力強く働いてきてくれたつわもの達なのである。やはり、化学療法剤の作用によって壊されてしまったと見るほかない。

現在、歯科総工事中なので、完成前の家屋みたいに不自由なところがまだ残っているのは仕方ないのだとは思うが、ちょっと下を向いて食事をとっているときに、大きな部分入れ歯が、まさにがばっと音を立てる感じで外れてくると、一瞬入れ歯をかみ砕いてしまいそうになり、何とはなしに情けなくなる。

はやりには敏感なようで（？）、人並みにコロナにり患した。昨年12月10日である。この原稿を書いている今日は１月７日なので、発症後４週間近いのだが、いまだに具合が悪い。いわゆるlong COVID（コロナ後遺症）のようである。高齢者や免疫不全症の患者などが発症しやすいとされている。私は、確かに85歳の高齢者ではある。長期間続いた悪寒はようやく無くなり、気分は少し良くなったが、鼻水が止まらない。しかも、膿性鼻漏である。85年間で、膿性鼻漏はこれまで記憶がない。免疫能の正常な人であれば、鼻腔に感染したコロナウイルスは免疫に攻撃されて、１週間ほどで死に絶え、コロナは治癒し、鼻漏もなくなる。４週間近くなるのに、まだ鼻漏が止まらないということは、まだコロナウイルスが鼻腔に鎮座ましますということで、なんともいまいましい。しかも、膿性鼻漏が出てくるということは、コロナウイルス感染だけでなく、それに引き続いて細菌感染が発生してしまったことを示唆する。もっとも、新たに風邪ウイルスに感染したのかもしれないが、膿性鼻漏はそれだけでは説明がつかないような気がする。学者もどきの嘆きは延々と続く。

ところで、老化に伴う精神的な失調は、身体的なそれよりも厄介であるともいえる。認知機能の劣化が進んで、自分の精神活動の異常を認知できなくなる状態に至ると、自己意識内での煩悶は消失してしまうので、気が楽になる筈

もちよりもちもち

である。そこに到達するまでの過程は複雑で、個人差もあり、通り一遍に語ることはできないが、私の置かれた状態はと言えば、従来経験しなかった行動をしばしば取るようになり、その事実に嫌気を催している感じである。

そもそも穏やかな人格は備えておらず、とげの立った人間ではある。家族には、数限りなく怒鳴り散らしてきたが、それは家庭内での話で、いわゆる人前ではそのようなことをすることはなかった。ところが、近時、居酒屋などで、他の客も驚くような大声で、家族を怒鳴りつけてしまうことがある。しかも、前後不覚になるような、酔いの回った状態での話ではない。胃全摘術以来、酒量はめっきり減り、そもそも、そんなに酔うほど飲めない。その証拠に、ややしばらく怒鳴り散らした後にすぐ、えらい自己嫌悪に陥るのである。

問題は、一瞬の激怒を他人の面前でも抑えられなくなってしまったことにあると見る。社会性の欠如である。勤務している老健施設では、施設職員に怒鳴り散らす入所者もたくさんいるが、私はそこまでは行っていないと思いたいが如何なものか。85歳は色々と辛いのである。

「雪だるま」

「雪遊び」

花

彫刻家　中島　睦雄

太平洋戦争の終結直後のことだったと思うが、私がまだ小学生の頃、いや、当時は国民学校と言ったかな？そんな頃、朝礼集会の時の校長先生のお話があった。その内容はこうだ。

「アメリカの兵隊の1人が言った言葉が印象的であった」と。

また、「『日本は戦争でメチャメチャになって住むところさえ難しいのに、そんな中で小さな缶詰とかに小さな花を植えて、その花を楽しんでいる様子の人たちを見た。その人たちはとても素晴らしい』と言っていた」そのようなことを仰っていたのを覚えている。

人の花に対する愛情について、まさにその通りだと思う。

現在、私は自分の生活で車に乗ることが多く、その車を走らせていると、色々な通りで素晴らしい花々を目にすることが多い。

私は思わず車を停めて写真に納めるのである。また、色々な町のご家庭で庭に花を咲かせているのにも良く目が行ってしまう。それぞれのご家庭で植え方、色があるのでそれを見させていただくのも非常に楽しい。

このような御家庭は、植えた御自身が楽しみ、同時に通行人にも楽しんでもらおうという想いを感じるものである。

このような花を愛する行為は日本に限らず、どこの国でも共通点なのかもしれない。

そういう私も、実は玄関前に植木鉢で2つ3つ花を咲かせている。お客様がおいでになった時、私より先に、綺麗に咲いているお花がお迎えするのである。その方がきっとお客様も喜んでくれるはずだと思うのである。

ゴール

主任保育士　倉澤　智子

今年度、定年退職を迎えた。38年前にスタートしたマラソンのゴールに、やっと辿り着いたという想いである。寂しさは殆どない。「やり終えた」という達成感の方が強いかも知れない。達成感といっても、やるべき事を全てやり終えた……ということではなく、「定年まで居続けることができた」という物理的な意味での達成感ではあるが……。

38年間の思い出はたくさんあるはずなのだが……。開設への反対運動、子どものいない生活、コンクリート打ちっぱなしの壁磨き、深夜まで続いた会議等々、開設当初のエピソードが衝撃的だったからなのか、その後の子どもたちとの思い出はぼんやりしている。そのことをポジティブに捉えるのであれば、子どもたちとの日々の生活が穏やかであり、普通の生活を送ることができていたということなのかもしれない。

私事になってしまうが、ここでの生活をふり返る上で外せない事柄がある。私の人生のターニングポイントになった大きな事柄である。それは「母」になったことである。

私は生後1ヶ月の女の子と運命的な出会いをした。以前、乳児を1年間育てたことがあった経験を買われ、その子のことを一時的に預かることになった。その後、実の親から、育てる自信が無いとの話があり、その当時の施設長にその子の将来が委ねられた。そういった流れの中で、私は無謀にも「母」になることを選択したのである。独身であったこともあり「やめた方がいい」という声も聞こえてきた。しかし、生後1ヶ月から3時間おきの授乳を含め、24時間一緒にいたことで、すでにその子のことを手放せなくなっていた。幸い私の両親は突然出来た孫娘のことを喜んで受け入れてくれ協力してくれた。職員の協力もあり、私は何とか「母」になることができたのである。

「母」になったことで私の仕事の考え方に変化があった。我が子は全力で守りたいと思う存在であり、自分よりも大切な存在であることを初めて知った。それと同時に、私の担当の子どもたちへの想いは、我が子への想いの足下にも及ばないものであったことを思い知らされた。娘と私に血の繋がりはない。それは担当の子どもたちも同じである。

3時間おきに授乳を経験したか否かの差は確かに大きく、乳児院と児童養護施設の枠を外し、乳児から担当すれば、より「母」に近づけるかもしれないことは実感している。何が言いたいのかというと、これまで、仕事で子どもは育たない……、と言われ、私なりにがんばってきたつもりでいたが、それは私の勘違いであり、担当の子どもたちとの関係は、仕事であったことを認めざるを得なくなった。つまり娘の存在が、私の力不足、至らなさに気づかせてくれたのである。

これまで、40年近くの子どもたちを担当してきた。これからは、その子どもたちと、仕事ではなく、応援者として寄り添っていきたいと思っている。

鷲宮青毛堀川菜の花と河津桜の見物に行く（3月3日）

【お知らせ】

地域小規模児童養護施設「はたい」（倉澤家）でのはたらきは、池田祐子を軸として引き継ぎます。

プリズム

東仙道家から「メメントモリ」

副施設長　小西　剛史

子どもと暮らしていると、日々色々な質問や疑問が投げかけられる。

「死んだらどうなるの？」先日、5年生になる子どもから突然聞かれ、どう答えようか一瞬戸惑った。なぜなら自分自身、それを子どもの頃から問い続け、未だに結論に至っていないからだ。

もちろん『天国に行くんだよ』『生まれ変わるんだよ』と、かつて教えられたように曖昧な答えで会話を終わらせることはできた。でもそれが子ども騙しで根拠のない物である事は薄々気づいている。それでいてそれらを信じたいという相反する気持ちに支配されて生きてきた。神話的で穏やかな思想と科学的で無感情な答えとの狭間で誰しもが思い悩んでいるのではないだろうか。

そして私はこう答えた。

「わからないけど、たぶん何もなくなるのかな。意識も感情も。だから死んだらどうなったか感じようがないんじゃないかな」

死という答えの出せない問いに対して子どもにどう向き合うべきか。『大人は何でも知っているだろう』と子どもは聞いてくる。「こうだよ」ではなく「自分はこう考えるよ」と伝え、いつか彼が自分なりの考えを持つ事ができればそれでいいのかも知れない。

仙道家から「鬼は外」

保育士　遠藤　恵里香

2月3日、光の子どもの家へ数年ぶりに鬼がやってきました。コロナ禍であったこの数年、鬼も三密をきちんと守り光の子どもの家への来訪を遠慮していたようですが、ついに今年数年ぶりの思いを乗せて子どもたちの前に現れました。コロナ禍以前の鬼は、夕食後に各家に出現し、家の中で子どもたちが泣き、叫び、隠れながら豆を投げつけ鬼退治を行っていました。

しかし、今年の鬼はいろいろな事情を鑑みて、昼食後子どもたちが園庭で外遊びをしている中に現れました。子どもたちは今か今かと豆を用意し臨戦態勢だったため、鬼が現れたことがわかると、一斉に豆を投げつけていました。

ほのかも同様に鬼を怖がりながらも果敢に豆を投げていましたが、豆を投げても鬼が倒れてくれないことに気づき戦意喪失（鬼によると視界の狭さ、寒さによる厚着で豆がヒットしていることに気がつかなかったとのこと）。建物の陰に隠れ、余った豆も初豆まきのひろみにあげて、鬼がいなくなるのをそっと伺っていました。

そんなところに鬼がほのかを見つけて鉢合わせになると、丸腰のほのかは渾身の力を振り絞り、両手を振り上げて

「わぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

と大声を出して威嚇し見事鬼は逃げていきました。

武器を持たない状態で鬼への恐怖に立ち向かったほのかはカッコよくとても頼もしかったです。

原田家から「物より事」

児童指導員　黒川　健一郎

幼稚園年小の寅泰の誕プレは「物」ではなく「事」にした。沢山の人に囲まれての暮らしなので、「物」のプレゼントはたくさんもらえるのだ。

寅泰は体を動かすこと、乗り物、生き物、ラーメン等が好きだ。それらを存分に味わえる特別な日になればと企画した。

まず車でお出かけ。奥寺から誕プレにもらったハンドル

のおもちゃを助手席につけた。寅泰も運転している気分になれるように。暫く車を走らせていると、道を曲がるとき片手掌でハンドルを回し、戻す時はそっとそえた掌でハンドルを滑らす私の様も見事にコピー。ウインカー音や方向で察し、同タイミングでハンドルを回せるまで上達した（笑）

昼食はご当地ラーメン。普通サイズのラーメンを注文し、店員の配慮で出していただいた子ども用食器や椅子は「いらないからっ!!」。手に持つと大きく見える普通の箸で熱々の麺を大人と同タイミングで口に運ぶ。「同じ事ができるんだよ」と言わんばかりのドヤ顔でこちらを見てニンマリ。完食。

昼食後は地域猫が多くいる山の上の神社。売店で買った餌を猫にあげながら色々な猫を可愛がった。

そろそろ車中で眠くなってくる頃、しかしここで寝てしまうと、夜、寝かしつけの保育士に負担が……。なので次は眠気も吹っ飛ぶ魅力的な「公園」へ。

広大で自然が多く、アスレチック的遊具も沢山、巨大な恐竜のオブジェ、なが～～～～いローラー滑り台がある。寅泰の眠そうな目が一気に開き、すぐに遊びたい気持ちが表れている体は駐めた車をも揺らす。降ろした途端ダッシュ!!……どこから手を着けて良いか分からず戻りのダッシュ!!

手始めにローラー滑り台へ。それ用の敷物をレンタルし、全長150m高低差38mの滑り台が設置してある山を登る。寅泰はあっという間スタート地点に。が、高低差に少し臆病になり、一緒に滑ることにした。子どもの遊具だろうと安易な気持ちで臨んだ私は後悔した。いざ滑ってみるとローラーの滑りがあまりにも良く加速が止まらない。足の摩擦でブレーキを掛けようにも抱えている寅泰が落ちないよう固定しているから減速できない。そのまま迎えた落差あるポイントで2人の体はほんの少し宙に浮き尻餅をつく。……敷物をレンタルしている意図が見えた。

恐さを克服した寅泰は「今度は一人で滑ってあげるからぁ！でも上まではいっしょにきてぇ、それで下で待ってていいよぉ」。子どもの容易な発言に潜む残酷さを再確認。今度は私が下までダッシュ！少しフライング気味で滑っていた寅泰だった。

アスレチックでは、高い所までは登ったが降りられず抱えての救助、救助したかと思えばすぐにまた登る。巨大な恐竜のオブジェにも登ろうとしていた……

沢山遊んでの帰路、やはりウトウトし始めたためおやつ作戦マックのドライブスルー。寅泰はソフトクリームを、私はホワイトチョコストロベリーフラッペを注文。寅泰は、フラッペの美貌に目を奪われ、受け渡しの際「それ僕の」と言わんばかりの前のめりで口を窄めていた。その様に店員もツボっていた。

そんなこんなで眠ることなく帰宅。その夜寅泰がぐっすり眠れたかは確認しなかったが、私が秒で深い眠りに就いたくらいだからきっと秒寝だろう。

あれから数ヶ月、未だにそのことが忘れられず、また連れてってと言って来る。次の機会はいつになるだろう？

日誌抄
2023年12月～2024年2月

【3月1日の在籍児童数】
幼児　4名　小学生13名
中学生6名　高校生9名
その他1名　計　33名

【12月】
2日　小学生3名職業体験で大宮国際動物専門学校へ
7日　菜々と吉尚それぞれ別のサッカースクール入会
8日　2名ご縁があり陶芸家

林香君さんのご案内で国立新美術館展へ
10日　ご招待を受けハンドベルコンサートへ
第2アドベント礼拝＆12月生まれの誕生会
17日　東大宮教会教会学校クリスマス会へ
第3アドベント礼拝
23日　3名、ご招待を受け女子サッカーWEリーグ観戦へ
24日　第4アドベント礼拝
25日　クリスマス、ページェント＆祝会
28日　餅つき

【1月】
1日　元旦礼拝＆食事会　多くの卒園生も来訪、夜は卒園生の会
7日　加須市二十歳の集いがあり卒園生1名参加
20日　パントリー
21日　仙道家、図工授業で作った善治、友則、福の作品を見に行田グリーンアリーナへ
22日　1月生まれの誕生会
27日　後援会による頑張ろう会、手作りうどんをご馳走になる

【2月】
5日　藤岡孝志氏による施設内研修
16日　食堂付近の水道管から水が噴き出し業者に対応を依頼
19日　2月生まれの誕生会
21日　県立高校入試2名が受験

【礼拝ご奉仕各位】　東大宮教会　木田浩靖教師　佐々木優牧師　佐野正子牧師

【委員会の主な動き】　**運営**　来年度の体制を検討、**危機管理**　避難訓練実施、**環境整備**　倉庫の整理、**食生活**　アレルギー研修受講、**研修**　内部研修、子どもワークショップ実施、**広報**　「光の子」発行、**情報・通信**　子どもからパソコン購入希望や、施設内のネット回線について要望があり対応、**クリスマス**　ページェント台本を刷新、**建築**　増田設計士と共に補修改修の検討

【実習受入】　東京家政大学2名、埼玉福祉保育医療製菓調理専門学校1名、埼玉県立大学2名、鹿児島女子短期大学1名、埼玉純真短期大学2名

【元職員の来訪】　岩瀬志穂　田口貴子　牧野由起子　和田優右子

【寄贈者各位】　秋葉まつ子　大塚東一　大橋清栄　岡本有代　黒岩千鶴子　坂田喜久江　佐野正子　関根淳子　関根由起子　仙道喜美子　高久容子　並木典子　丹羽吉康　長谷川智子　浜田文昭　松岡喜代子　村田祐介　門司一徹　和田優右子　エネミンスプラスティック整体やぐち　大阪シーリング株式会社　㈱王将フードサービス　カーブス（大利根店、古河下辺見店、雷電町店）　吉備工業　古河農友会　コストコ明和倉庫店　コヤナギスポーツ　㈱ゴルフ・ドゥ　埼玉県食鳥協会　すくすく広場　セカンドハーベストジャパン　チュチュアンナ　㈱テイ・エスロジスティクス　冨田農園　㈱なとり　日本鏡餅組合　ネッツトヨタ東埼玉　細間郵便局　ほっともっと　（公財）毎日新聞東京社会事業団　他多数の皆様

【ボランティア各位】〈華道〉岡本有代　〈施設補修〉栗橋営繕　〈手芸〉山田智・裕子　〈学習〉常松洋介　向井進　関口晃司　〈保育〉坂本美紗子　他多数の皆様

ご寄付について（物品の寄贈は事前にお問い合わせください）

【郵便振替】00130-1-128022

他銀行から【銀行名】ゆうちょ銀行　【金融機関コード】9900　【店名】019店

【店番】019　【預金種目】当座　【口座番号】0128022

【発行】社会福祉法人　光の子どもの家　【住所】〒349-1155　埼玉県加須市砂原277-3
【電話】0480-72-3883　【FAX】0480-72-6649　【メール】hikarinoko@ceres.ocn.ne.jp
【Webサイト】http://www.hikarinokodomonoie.com/　【印刷】（株）エル・アートデザイン